

第1章

社会学の歴史

第1節 社会学史

1 デュルケムの方法論的集合主義

デュルケムの「方法論的集合主義」とは、社会をモノのように客観的に実在するものとして分析しようとする方法論的立場である。デュルケムは、「社会現象は個人の心理に還元されず、個人に外在し、個人を拘束する事実として存在する」と考え、これを「社会的事実」と呼んでいる。そして、そのような社会的事実の解明こそが社会学の目的であるとした。

著書の『自殺論』においては、自殺は、個人的事情というより、社会の持つ凝集力や規制力といった力の作用によって引き起こされると論じている。

2 ウェーバーの方法論的個人主義

ウェーバーの「方法論的個人主義」とは、社会の様態を、個人の心理や行為から説明しようとする方法論的立場である。ウェーバーは、「行為者が彼の行為に付与している思念された意味を理解すること」、すなわち行為の動機を理解することを重視し、それが社会現象とどのように関係しているかを因果的に解釈し説明するという方法を提唱している。

なお、動機理解を重視する彼の社会学は「理解社会学」と呼ばれる。

著書の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』においては、プロテスタンティズムの倫理に動機づけられた勤勉と儉約を基調とする人々の労働活動が、予期せざる結果として近代資本主義を成立せしめる原動力となったと論じている。

3 ジンメルの形式社会学

ジンメルの「形式社会学」は、心的相互作用の形式（社会化の形式）を探求する社会学である。ここでいう「心的相互作用」とは、諸個人が相互に他者に志向し、作用を及ぼし合うことをいう。彼は、社会はこの相互作用において成立するとしている。

この相互作用は、内容と形式に分けることができる。内容は、人々の意欲・関心・目的をはらむもので、形式は人々の結合のパターンである（社会化の形式）。内容は、それが政治的現象なら政治学が、経済的現象なら経済学が扱うこととなる。しかし、そこに共通に見いだされる形式（上位下位、競争、闘争など）を抽出してきて探求するのは、政治学でもなく、経済学でもなく、社会学の務めであるとジンメルは言う。

例題 国家専門職 平成 28 年度改題

次は、G. ジンメルに関する記述であるが、A, B, C に当てはまるものの組合せとして妥当なのはどれか。

G. ジンメルは、複雑化する社会における個人の問題に関心をもち、社会实在論と社会名目論をともに排し、広義の社会を諸個人間の[A]としてとらえた。そしてこの[A]の示す様式を社会化の[B]と呼び、[B]社会学を成立させた。

彼は、社会化の[B]を経済、宗教などの社会化の内容から区別して研究することによって、社会学を他の社会諸科学から区別された特殊専門科学として樹立することができる」と主張し、『C』などを著した。

正解

A : 心的相互作用 B : 形式 C : 社会学

4 意味学派

パーソンズの構造機能主義社会学を批判する文脈の中から 60 年代アメリカで発達した諸派を「意味学派」という。

■意味学派（代表的なもの）

<p>シンボリック相互作用論 (ブルーマー)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・相互作用における人々の意味解釈過程を重視し、この過程を通じて人々が能動的に社会を構築再構築していくとらえるものである ・ブルーマーが代表的論者であり、G. H. ミード、シカゴ学派を源流に持つ。 	
<p>ドラマトウルギー (ゴフマン)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・社会的場面を演劇に見立て、行為者を演技者もしくは観客とみなして、相互行為を分析していく手法である ・相互作用場面において、人は役者のように自身を演出してみせ（自己呈示）、そうすることで、他者が自分に対して抱く印象を統制、管理する（印象操作）。それは、たとえば「好人物」の印象を維持しようとするときのような利己的目的の場合も、他者の失態に気づかないふりをする（儀礼的無関心）ときのような利他的目的の場合も、あるいは、その場にふさわしくふるまうことで場の空気を乱さないようにするときのような秩序維持のための場合もある 	
<p>現象学的社会学 (シュッツ)</p>	<p>生活世界と多元的現実</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・社会を相互主観的に構成された意味世界として分析する社会学であり、A. シュッツが創始者である ・E. フッサールの現象学、M. ウェーバーの理解社会学などを源流に持つものである <p>科学的に把握される以前の、人々が自明のものとして他者とともに現実として経験している世界を「生活世界」という。シュッツは、この世界の構造を描き出し、経験されている現実が多元的であることを指摘した。</p>

エスノメソドロジー (ガーフィンケル)		人々が無意識のうちに共同して行う意味付与活動を通じて、意味、事実性、客観性などが成就し、秩序ある状況が形成される過程を明らかにしようとする。H. ガーフィンケルが現象学的社会学の影響のもとに創始。会話分析などを用いる
	違背実験(期待破棄実験)	ガーフィンケルが考案。相手の期待をはぐらかすような返答を繰り返し、会話を破綻させることを通して、日常会話を成り立たせていた自明的な共有ルールを逆に明るみに出す実験
	会話分析	サックスらが創始。会話の組織、構造、構成を解明する方法。録音した会話の書き起こしと分析を通して、話題がどのように構成されていくか、会話がどのように継続されていくか、話者の順番がどのように入れ替わるか、またそこにどのような手続きやテクニックが介在しているかといったことを解明する

例題 国家専門職 平成24年度改題

次は、エスノメソドロジーに関する記述であるが、A、B、Cに当てはまるものの組合せとして妥当なのはどれか。

ガーフィンケル (Garfinkel, H.) が提唱したエスノメソドロジーは、人びとがいかにして、相互行為の過程の中で社会的[A]をつくり出すのか、ということに研究の焦点を当てる。[B]な行為やその遂行、さらにそうした行為が遂行されるローカルな文脈の構成に関心を向けるものである。

実証研究の代表的なものは、サックス (Sacks, H.) らが創始した[C]である。サックスは、自殺予防センターにかけられた電話、10代の少年たちのグループセラピー、一般家庭の電話などを録音し、それを詳細に書き起こして分析を試み、それらのやりとりには精巧な秩序があることを示した。

正解

A : 現実 B : 日常的 C : 会話分析